
ラオス小児外科プロジェクト 活動報告 2022

公益社団法人 日本WHO協会



活動報告項目

- 01.** プロジェクトの概要 p.1
- 02.** 2022年度の活動タイムスケジュール . . p.2
- 03.** 投入の実績 p.3
- 04.** 考察 p.5
- 05.** 会計報告 p.6
- 06.** 活動の詳細 p.7

01. プロジェクトの概要

背景：

ラオスの新生児・乳児死亡率は東南アジアで最も高く、その原因の一つは新生児・乳幼児外科疾患に対する診療体制が整っていないことにあります。感染症や下痢といった死因にはWHOなどの介入もあり、死亡率は下がってきていますが、外科的処置を必要とする先天性疾患への介入は行われていないのが現状です。また、ラオスには小児外科に特化した手術を行える医師は数名のみであり、ラオスの外科的処置を必要とするこどもたちに十分に手が行き届いているとはいえない状況であることに加え、次世代を養成する制度も確立されていなかったために、小児外科医の養成も困難な状況でした。

SDGsでは、持続可能な開発目標のひとつに、「全ての国が新生児死亡率を少なくとも出生1,000件中12件以下まで減らし、5歳以下死亡率を少なくとも出生1,000件中25件以下まで減らすことを目指し、2030年までに、新生児および5歳児未満の予防可能な死亡を根絶する」としています。5歳児未満の死亡率においては、死亡率が低下するほど外科的処置を必要とする先天性疾患の割合が増えてくることがわかっており、今後ラオスにおいても小児外科医のニーズが高まることが予測されます。

また、WHO西太平洋地域事務所（WPRO）の今後の重点項目の一つに「Safe and affordable surgery」が挙げられてもおり、外科領域の支援は発展途上国の支援において遅れをとっていた分野だからこそ、本プロジェクトの意義は大きいと考えています。

目的：「ラオスにおける小児外科医専門医制度の確立のため、小児外科の卒後研修プログラムを強化する」

本プロジェクトではわが国を代表する新生児外科施設の指導医が、ラオス健康科学大学の卒後研修の一環として、小児外科医の育成を行っています。

2020年から活動ははじまり、主にラオス小児外科専門医制度におけるラオス人指導医の養成を行ってきました。COVID-19の世界的流行を受け、当初はオンラインでの講義や症例検討会、国際シンポジウムの開催支援、遠隔による症例へのコンサルテーション対応などをおこなってきましたが、2022年にはCOVID-19の世界的流行を受けた影響も緩和され、現地への渡航が可能となり、日本人専門家の派遣なども行われました。

3年間の活動を通し、ラオスの小児外科専門医制度における暫定指導医が養成され、今後ラオスにおいて正式に小児外科専門医制度が開始される予定です。

02. 2022年度の活動タイムスケジュール

4月

4月5日～
プロジェクトマネージャーの現地派遣

2022年4月～2022年8月まで
オンラインセミナーの開催支援
対象：ラオス小児外科専門医制度におけるカリキュラム2年目の候補者
計9科目（23時間）が9名の日本人専門家とラオス人暫定指導医によって開催された

8月

2022年9月～2023年2月まで
オンラインセミナーの開催支援
対象：ラオス小児外科専門医制度におけるカリキュラム3年目の候補者
計12科目（43.5時間）が10名の日本人専門家とラオス人暫定指導医によって開催された

9月

9月26日～10月7日
窪田昭男氏（プロジェクトリーダー）の現地派遣

11月

11月28日～12月4日
奥山宏臣氏（大阪大学小児外科教授/日本小児外科学会理事長）の現地派遣
窪田昭男氏（プロジェクトリーダー）の現地派遣

プロジェクトムービーの撮影

11月30日
第3回小児外科国際シンポジウム in Lao PDR 開催
現地にて窪田昭男プロジェクトリーダー、奥山宏臣氏、
北川博昭氏（聖マリアンナ医科大学学長）、中村安秀理事長が参加した。

2023年

2月

2月28日
プロジェクトマネージャーの帰国

プロジェクトムービー完成

3月

3月16日～
本邦研修の実施（Vongphet医師の名古屋大学医学部附属病院での研修）

4月8日
ラオス小児外科シンポジウム in Osakaの開催

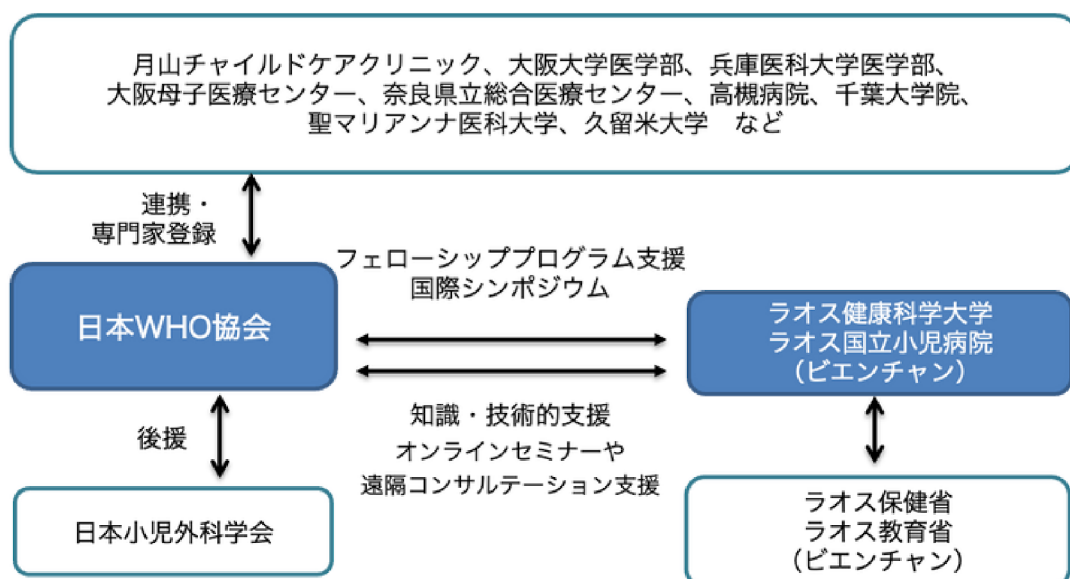
03. 投入の実績

当プロジェクトにおいて活動した日本人専門家：

窪田 昭男 （月山チャイルドケアクリニック/プロジェクトリーダー）
奥山 宏臣 （大阪大学小児外科教授/日本小児外科学会 理事長）
大植 孝治 （兵庫医科大学小児外科）
島田 憲次 （枚方療育園）
米倉 竹夫 （奈良県立総合医療センター）
竹内 宗之 （大阪母子医療センター集中治療科）
稲田 雄 （大阪母子医療センター集中治療科）
西川 正則 （大阪母子医療センター 放射線科）
土居 ゆみ （高槻病院 小児周術期センター）
菱木 知郎 （千葉大学 小児外科学）
北川 博昭 （聖マリアンナ医科大学）
加治 建 （久留米大学小児外科）

ラオス側の主な関係者：

Vongphet SOULITHONE（ラオス国立小児病院 手術室部長）
Alongkhone PHENGSAVANH（ラオス健康科学大学 医学部副学部長）
Lyfuxu LYNHIAVU（ラオス健康科学大学 外科部門）
Phouvang SENG MUANG（ラオス健康科学大学 医学部長）をはじめ、
Alongkhone PHENGSAVANH（ラオス健康科学大学 医学部副学部長）、
Dr.Phedavanh（ラオスの初代小児外科医）
Virasack RAJPHO（ラオス健康科学大学 サブスペシャリティ部門副部長）
Douangphachanh XAYSOMPHOU（ラオス健康科学大学医学部 産科）
Sanyalack SAYSANASONGKHAM（ラオス国立小児病院 小児科） ほか



第3回小児外科国際シンポジウム in Lao PDR 登壇者一覧：

窪田 昭男 （月山チャイルドケアクリニック/プロジェクトリーダー）
Vongphet SOULITHONE（ラオス国立小児病院 手術室部長）
Virasack RAJPHO（ラオス健康科学大学 サブスペシャリティ部門副部長）
Douangphachanh XAYSOMPHOU（ラオス健康科学大学医学部 産科）
Sanyalack SAYSANASONGKHAM（ラオス国立小児病院 小児科）
北川 博昭 （聖マリアンナ医科大学 学長）
奥山 宏臣 （大阪大学小児外科/日本小児外科学会 理事長）



ラオス小児外科シンポジウム in Osaka 登壇者一覧：

勝井 由美 （日本WHO協会 プロジェクトマネージャー）
Vongphet SOULITHONE（ラオス国立小児病院 手術室部長）
窪田 昭男 （月山チャイルドケアクリニック/プロジェクトリーダー）
奥山 宏臣 （大阪大学小児外科/日本小児外科学会 理事長）
湊本 康史 （国際医療福祉大学成田病院小児外科 小児外科教授）
岡松 孝男 （昭和大学 名誉教授/国際開発救援財団 (FIDR) 理事）

04. 考察

本プロジェクト「ラオスにおける小児外科卒後研修プログラムの確立」は、2020年に3年間のプロジェクトとして立ち上げられたもので、今年でその3年間のプロジェクトが終了しました。小児外科の卒後研修ということで、当初、日本人講師が現地に赴いて各科目を1週間で講義、症例検討と手術指導、超音波検査あるいは術後管理等のハンズオン指導を行う予定でしたが、折からのCOVID-19感染の世界的流行によりNCGMからの助成金授与が決定した後に急遽全てのプログラムをオンラインでするように指示され、プログラムを大幅修正しました。3年目の半ばまでオンラインでの研修が行われ、その時点では卒後研修・国際シンポジウムもオンラインでできるのではないかと思いました。しかし、3年目の半ばで渡航が解禁となり、マネージャーが手術室・ICUに入り、小児外科指導医が2回に亘ってハンズオン手術指導をし、第3回ラオス小児外科国際シンポジウムとラオス小児外科シンポジウムin Osakaが対面で行われましたが、これによりハンズオンでの手術指導がより効果的であることが再認識され、同時にラオスの小児外科を如何に発展させるかについて突っ込んだ話し合いができました。一方、全面的なオンライン研修のために相談したい症例の画像をWhatsAppを使って筆者に送り、診断あるいは超療方針を相談する遠隔コンサルテーションが自然に発生しました。渡航できない状態での遠隔コンサルテーションの有用性と必要性は明らかであったため、コンサルテーションの書式を整え、症例によって回答者を替えるなど制度化しました。遠隔コンサルテーションはオンラインだからこそできること、即ち交通の便が悪い地方に普及させるなど今後の発展が期待される分野と考えます。

3年が終わり、オンライン研修で充分できることとハンズオン研修がより有用であることがはっきりしたと思います。また、ラオスの小児外科の今後の発展に何が必要であるかが明確になったと思います。

プロジェクトリーダー・窪田昭男

05. 2022年度 会計報告

当初予算¥10,840,911（2022年度5月理事会承認）に対し、実質の活動金額としては¥10,520,161であった。差異金額は¥320,750であった。

2022年度5月理事会承認予算：
¥10,840,911

項目	金額
1.一般謝金	¥3,009,574
(1) 講師謝金	¥1,776,000
(2) 講義原稿謝金	¥1,163,000
(3) 国外活動謝金（日本人）	¥0
(4) 国外活動謝金（日本人以外）	¥70,574
(5) 見学謝金	¥0
2. 旅費	¥2,036,000
(1) 鉄道	¥20,000
(2) 船賃・車賃	¥271,000
(3) 航空費	¥960,000
(4) 査証取得費用	¥10,000
(5) 宿泊料	¥775,000
3. 庁費	¥4,390,497
(1) 借料及び損料	¥0
(2) 会議費	¥0
(3) 消耗品費	¥171,000
(4) 備品費	¥0
(5) 賃金	¥3,432,000
(6) 印刷製本費	¥0
(7) 通貨運搬費	¥81,427
(8) 光熱水量	¥0
(9) 保険料	¥193,050
(10) こども・子育て拠出金	¥0
(11) 雑役務	¥513,020
4. 人件費補填	¥960,840
人件費補填	¥960,840
5.その他	¥444,000
その他	¥444,000
総 額	¥10,840,911

2022年度会計報告：
¥10,343,391

項目	金額
1.一般謝金	¥2,195,821
(1) 講師謝金	¥1,084,000
(2) 講義原稿謝金	¥568,200
(3) 国外活動謝金（日本人）	¥0
(4) 国外活動謝金（日本人以外）	¥543,621
(5) 見学謝金	¥0
2. 旅費	¥1,101,744
(1) 鉄道	¥145,363
(2) 船賃・車賃	¥7,618
(3) 航空費	¥586,884
(4) 日当	¥189,000
(5) 宿泊料	¥172,879
3. 庁費	¥7,045,826
(1) 借料及び損料	¥0
(2) 会議費	¥0
(3) 消耗品費	¥27,401
(4) 備品費	¥0
(5) 賃金	¥4,595,077
(6) 印刷製本費	¥0
(7) 通貨運搬費	¥107,565
(8) 光熱水量	¥0
(9) 保険料	¥203,610
(10) こども・子育て拠出金	¥637,565
(11) 雑役務	¥1,474,608
4. 人件費補填	¥0
人件費補填	¥0
5.その他	¥0
その他	¥0
総 額	¥10,343,391

なお、2022年度費用のうちラオス人医師の本邦研修における下記費用については、Pierre HELARDOT教授所属するフランスのNGO団体（S.E.M.）より費用負担を受けた。

旅費交通費：Vongphet SOULITHONE氏 航空券代として ¥139,729

旅費交通費：Vongphet SOULITHONE氏 宿泊費として ¥37,050

計：¥176,770

06. 活動の詳細

(1) プロジェクトマネージャーの現地派遣

2020年7月の始動後、COVID-19の影響を受け日本人専門家の派遣ができない状態が続いていた。しかし2022年に国境が段階的に開放され、2022年4月にプロジェクトマネージャーの勝井が現地派遣された。現地の状況をより知ることができたとともに、ラオス側との繋がりを強めることができた。プロジェクトマネージャーは2023年2月末に現地での任務を終えて帰国した。



写真：ラオス国立小児病院にて
カウンタパートのラオス健康科学大学の関係者とともに
プロジェクトの今後についてミーティングが開催され、
当プロジェクトへの熱い期待を示された。

左から看護師長 Souvannaさん、
Vongphet 医師、Chaypachan 先生、
Sommanikhone 院長、Alogkhone 先生、
窪田 祥吾 先生 (WHOラオス事務所)、
勝井 (プロジェクトマネージャー)、
Bandith 副院長

(2) ラオス語版「最新新生児外科学」作成

これまでラオスにはラオス語の小児・新生児外科に関する教科書等は存在せず、ラオス人医師が小児外科学を学ぶためには外国語の教材を用いて学ぶ必要があり、学習における壁となっていた。当プロジェクトでは、開始当時より日本の「最新新生児外科学（編集：窪田昭男、奥山宏臣）」の翻訳作業を行ってきており、2023年3月にはラオス語翻訳を完了させた。今後、ラオスの小児外科専門医制度においてこの教材が用いられる予定である。

(3) 小児外科専門医制度における オンラインセミナーの開催支援

ラオスの小児外科専門医制度における、1年目の講義と2年目の講義が日本人専門家とラオス人医師によって実施された。（ラオスの小児外科専門医制度のカリキュラムは3年構成）ラオスの小児外科専門医制度はCOVID-19の影響を受けて正式な開始が延期されているが、近日中には公式に開始予定とされている。

【実施講義科目数と時間】

1年目：計8科目、23時間

2年目：計12科目、43.5時間

(4) 日本人専門家による現地での手術指導

2022年9月末に窪田昭男氏（プロジェクトリーダー）が2週間、11月末～窪田氏と奥山宏臣氏（大阪大学教授、小児外科学会理事長）がラオスへ渡航し、ラオス国立小児病院のVongphet医師をはじめとする小児外科医に手術指導を行った。手術室には、腹腔鏡手術に必要な機材が使用可能な状態で用意されていることも奥山氏と確認した。Vongphet医師が手技を取得すればラオスでも低侵襲の手術が可能となり、患者と家族にとって身体的にも経済的にも負担が軽減できると考えられるため、今後腹腔鏡手術導入に向けた支援も視野に入れ、名古屋大学での研修に参加するなど、近い将来の腹腔鏡手術の実施に向けて支援を行った。



(5) 遠隔コンサルテーション

2022年（1月～12月）は、13例の遠隔コンサルテーションを実施した。ラオス側の緊急の要請を受けて、日本人専門家チームがWhatsAppなどを駆使し、オンライン上で指導助言するシステムである。疾患は、先天性外科疾患4例、肝胆道疾患4例、固形腫瘍4例であった。写真は、遠隔での助言を受けラオスで初めて超音波ガイド下のチューブ腎瘻術に成功した症例である。本システムはラオス側の評価も高く、遠隔医療のモデルとして多方面での展開が期待されている。



写真：
遠隔コンサルテーションで日本人専門家より受けた助言をもとに、同病院の放射線科と連携しながら処置を行っている様子。

(7) 第3回小児外科国際シンポジウム in Laos

2022年11月30日に「ラオスの小児外科における多職種連携」と題し、多くの他部門・他職種関係者が参加し、総勢 70 名程度での開催となった。

日本からは中村安秀理事長、窪田昭男プロジェクトリーダー、大阪大学の奥山宏臣教授、聖マリアンナ医科大学の北川博昭学長が現地参加された。ラオス側からは、Dr.Phouvang SENGMUANG (ラオス健康科学大学 医学部長) をはじめ、Dr. Alongkhone PHENGSAVANH (ラオス健康科学大学 医学部副学部長)、Dr. Phedavanh (ラオスの初代小児外科医) や、その他ラオス健康科学大学の関係者や若手の研修医など小児外科の部門を超えて、多くの関係者が参加され、今後のラオスの小児外科について議論が行われた。

ディスカッションにおいては「How to Improve the Neonatal Surgery in Lao?」というテーマのもと活発な意見交換が行われた。特に若手への教育の重要性が議論され、Alongkhone医学部副学部長から今後計3つの教育機関を設ける方向性を示された。また、ラオスの小児外科向上のために1. 小児外科専門医候補者の早急な確保、2. 若手へ小児外科の面白さを広めること、3. 早期診断、搬送後の迅速な治療介入、術後管理など他部門連携と臨床技術の向上の3つがあげられ、今後取り組んでいく必要があることがラオス側の関係者と同定された。



(8) プロジェクトムービーの作成

ラオスにおいて小児外科医の認知度を高めること、また当プロジェクトの広報を目的とし、Vongphet医師の活躍に焦点をあてたプロジェクトムービーを作成した。

タイトル：Challenge for the safe and Affordable Newborn Surgery in Lao

今後、ラオス国内では完成したムービーをラオスにおける小児外科の認知向上と、小児外科専門医候補者の確保を目的として使用される予定である。国内においては、日本WHO協会の活動としてワンワールドフェスティバル、シンポジウム等で上映した。引き続きWHO協会の活動の広報と今後はFundraisingにも活用していく予定である。



作成されたムービーは、当協会HPから閲覧可能です。
右のQRコードより「ラオス小児外科プロジェクト」の
特設ページに飛べ、閲覧できます。



(9) ラオス小児外科シンポジウム in Osakaと本邦研修

2023年3月16日～4月12日に、ラオス人小児外科医のVongphet医師を日本に招き、国内での研修を、Pierre HELARDOT教授の所属するフランスのNGO団体と共同で開催した。

3月18日には、Vongphet医師は名古屋大学医学部附属病院で開催される「日本小児外科手術 Off the Job Training」へ参加し、腹腔鏡手術の基本的な手技獲得に臨んだ。

その後、4月7日まで名古屋大学医学部附属病院にて研修に参加し、4月8日には大阪で、日本人専門家を招き「ラオス小児外科シンポジウム in Osaka」を開催した。

シンポジウムでは、Vongphet医師を中心として、当プロジェクトの紹介に始まり、国際的に活動されてこられた日本の小児外科医の方々と一緒に「ラオスの小児外科発展のために必要なこと、日本ができること」をテーマとして総合討論などが行われた。小規模ならではの活発な議論が行われ、Vongphet医師からは「非常に心に響きました」とメッセージもいただいた。

